

カフェで出
会った女性
三人と速攻
で自宅へ

ジンは散歩がてらにとあるカフェ
に立ち寄った。

そこは雑貨屋にもなっているカフェ。
エ。

雰囲気もアットホームだった。

一階にはにこやかな雰囲気の女性が二人。

胸元が大きい。二人ともキャミソールだ。

夏の暑さが窓から見える向かいの

公園を照らしている。

ジンは雑貨を見に来たという二階へ案内された。

二階へ上がると別の女性が椅子に座っていた。

その二人の太ももはホットパンツから出ていてムッチムチだ。

「ここはいろいろな方が雑貨を置いて販売しているフリースペースですわ」

「実は僕・・・・・・・・」

ジンは息を飲んだ。

「・・・・・・・・？どうしたの??」

「・・・・・・・・小説を

売ったりしてるんです」

二人は微笑んだ。

「あなたもクリエイターなのね」

ジンは自身がエッチな内容の小説
を書いていることを打ち明けた。

「へえ・・・・・・・・そんな内容を」

女性は頬杖をついて顔を赤らめた。

太ももがモジモジと動く。

「今からあなたのお家へお邪魔してもいいかしら？」

急にそんなことを二人は口にした。

ジンはきょとんとしている。

「まあ・・・取材・・・と言っ
たらなんだけど」

女性の一人が駆け足で一階へ降り
る。

「小説の題材にならないかしら？」

しばらくして女性が二階へゆっく
りとした足取りで戻ってきた。

「ど・・・・・・・・どうしたんでしょ
うか・・・・・・・・？」

「一回のスタッフの子の了承も得
たわ。相談の結果、さっき私が言
った通りよ」

「しゅ・・・・・・・・取材！??」

「ちなみに彼女も行きたいって言
っているから」

ジンが小説を書き始めたのはもう
10年程前にさかのぼる。

きっかけは自分の欲求を文章にし
て販売してみたらどうなるだろ
う？という安易なもの。

売れてはきたものの、結局それは
自分の想像の世界でしかなかった。

そのはずが・・・・・・・・・・。

「んん・・・・・・・・・・じゅぶじゅぼ
ぼぼ・・・・・・・・」

ジンはカフェの女性三人と自宅へ
走り込んでいた。

カフェへ立ち寄ってから30分も経過していない。

「こうやってたっぷり・・・・・・・・濃密なリアル取材をして・・・・じゅぼぼ」

ジンのバナナのように反り立ったペニスを我先とばかりに啜え、しゃぶりつく野生動物のようなメ

ス二人。

(体験版は以上になります。ご読了ありがとうございました)